



publishing house: moriyama 2-19-52 Kanazawa
Jodo Shinsyu Jhokoji phone 076-252-4922
www.jhokoji.net/ info@jhokoji.net 2015.04.01

雑行を棄てて本願に帰す

道因寺住職

相馬

豊

おはようございます。白山市の海岸線の方の相川(そうじ)という在所にある道因寺の住職をしております相馬豊と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

五感を通す

今日は風もなく本当に穏やかな秋晴れですが、二日ほど前でしかたれども、たまたま新聞のコラム欄を読んでいます。こんな記事が出てまいりました。100人の方にアンケートをとったことなのですけれども、こんな質問でした。「あな

たにとって秋は何色ですか」と、このような質問が書かれていました。皆さんは、秋といったら何色を思い浮かべますかね。秋といったら紅葉ですから一番多かったのは赤色な色で約80%。そして次に多かったのが青色。秋晴れの青。今日はまさしく秋晴れの青。それぞれの方にはそれぞれ五感を通した秋の色をお持ちではないかなあと思うのです。実はこの五感で感じていくというところが非常に大切なことだと私は思います。

現在はなかなか五感を通して感じていくということが生活の中から消えてきました。例えば今ほどは結願(けつがん)日中(にちゅう)のお勤めでしたが、参集されたお寺さんがそれぞれの声を大にして「如来大悲の恩徳は、身を粉にしても報ずべし」と最後の御和讃をお勤めされました。それを私たちは、五感を通してどういうふうにするのか。そこが大切なことではないでしょうか。

言葉というのは知識として覚えていくのではなくて、やはりそこには五感を通して忘れていたことを聞いていく。あるいは疾(と)うにわかっていたつもりだったけども、何ひとつ分かっていなかったんだということを通して自分の五感という感性を通してながら聞いていく。そういう聞き方が現代は段々段々なくなってきたております。特にこの報恩講というのは、そのお勤めに出遇うことの中に大切なことが響きとなって私たちに伝えられています。その響きに出遇っていくということもひとつ大事にさせていただきたいと思いま

言葉となった本願

昨日は本願ということをお話させていただきました。その本願というのは最初から本願があったのではなくて、本願を建てなければならなかったという大きな理由があるわけです。それはまさに法蔵がありとあらゆる命の有り様を聞き取っていった時、そこに様々な命というものが生まれ、育まれて、そして亡くなっていく。しかし、それは単に亡くなっていくのではなくて、その一つ一つの命の中に苦悩を持ち続けている。あるいは悲しみをもち続けている。そして、その命そのものが終わっていく。その悲しみを通していった時、悲しみの奥底の中には祈らざるを得ないものがあるということですよ。手を合わさざるを得ない。そういう祈りというものが法蔵の中に自分の思いを超えて起こってまいりましたと。

思いを超えて沸々と起こっていったけれども、どう言葉にしているかまだ分からない。『正信偈』

でいいますと「五劫思惟之摂受」と出てまいります。その前が「超発希有大弘誓」。思いを超えて起こってきたけれども、まだ言葉にならない。五劫思惟し続けた時に、ようやく言葉として、文字として表わすことができましたと。

お葬式の折に『正信偈』が拝読されます。その時、「超発希有大弘誓」で一旦声を収めます。収めた後、導師の方が改めて「五劫思惟之摂受」と声を出されてからまた「重誓名声聞十方」と正信偈が続いていくわけですけれども、なぜあそこで声を一旦収められるのか。

お葬式の場合ですと、その「五劫思惟之摂受」と言った後に焼香が始まるわけです。けれども、実はこれは焼香の合図として一旦間を置いて声を出すのではないのです。これは法蔵に本願というものが起こってきたけれども、言葉になっていないのですよ。言葉になるまでの間です。五劫思惟ということをしなければ言葉として表わすことが出来なかった。だから「五劫思惟之摂受」の前と後では違う意味があるわけです。「五劫

思惟之摂受」の前はまだ言葉となっていない。「五劫思惟之摂受」の後から本願が説かれていくわけです。

次の「重誓名声聞十方」の「聞」というのは「聞かしめん」ということです。ありとあらゆる方向を超えて生きている人すべてにどうか聞いてくださいと。これは聞くのではなくて、どうか聞いてくださいです。私たちに聞かしめんがために本願が言葉となつて表れてきました。

その本願ということを親鸞聖人は、昨日の最後に申しましたけれども、

如来の本願を説きて、経の宗致とす。すなわち、仏の名号をもつて経の体とするなり

『真宗聖典』一五二頁

こういってお言葉を親鸞聖人は『教信証』教巻のところに書き表されました。この「経」というのは『大経』(『仏説大無量寿経』)です。『大経』はまさにその本願が説かれていた経典です。『大経』は何がその「宗」、

中心かという、如来の本願だと。その如来の本願が宗であると。「体」は具体ですから、その宗は具体的に何を以て表わすかという「仏の名号」すなわち南無阿弥陀仏です。

南無阿弥陀仏

蓮如上人は五帖目の『御文』第十三通に

それ、南無阿弥陀仏ともうす文字は、そのかずわずかに六字なれば、さのみ機能のあるべきともおぼえざる

『真宗聖典』八三九頁

南無阿弥陀仏、わずか六文字です。その六字の中にそんな功德があるようには思えないというのですよ。これは現代の私たちもそうでないでしょうか。

お通夜とか葬儀の会場で出会った方々にこういうことを訊ねたことがあります。「お通夜、葬儀の時に皆さんはお焼香に行かれましたけれども、お念仏の声が聞こえてきませんでしたか？」と聞いて



「境内の銀杏」2014.11.21 坂本茂吉

たことがございます。

その時にある方はこう言いました。「いや、お念仏は称えていますよ」と。「声には出してはいないけれども、自分の胸の中ではナンマンダブツ、ナンマンダブツと申しています」と。こう言われた方がおられます。またこういうことを言われた方もおられます。「焼香に出た時、先に焼香された方や横に並んだ方が合掌をしているけれども、どなたもナンマンダブツ、ナンマンダブツと声に出していないから、恥ずかしいので念仏申しませんでした」と。こういう方もお

られました。

なかなかこの念仏というものが声に出でこないというのが現実ではないでしょうか。なかなか「ナンマンダブツ、ナンマンダブツ」と声に出し難くなくなってきた。しかし、親鸞聖人や蓮如上人は、私たちにどういふ教えを勧められたかと申しますと、親鸞聖人が唯円ゆいえんというお弟子の方に語られた言葉が残されている『歎異抄』、その第二章に

ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり

『真宗聖典』六二六頁

「ただ念仏して」とこういってお言葉が出ております。また蓮如上人でいいますと、繰り返し、繰り返し『御文』というものを通して私たちに、「どうか称名念仏してください、くれぐれもお願いたします」とおっしゃられて、そして最後は「あなかしこあなかしこ」とおさめられております。

雑行を棄てて本願に帰す

法然上人に出遇った親鸞聖人ですが、その法然上人のお話の要は何だったかと申しますと、常に法然上人は「念仏せよ」とお話されていた。法然上人がお話する時の要として「念仏申してくださいよ」と。これを繰り返し、繰り返し言われていた。その言葉を親鸞聖人も先輩の方々と一緒に聞いていかれた。そのお話を聞いた時に親鸞聖人は、その「念仏申してください」という言葉を通しながら何がはつきりしたのか。あまりご自分のことは書かれない親鸞聖人ですけれども、『教行信証』後序にこういふふうにかかれました。

建仁辛けんんにんかのとの酉とりの曆れき、雑行ぞうぎょうを棄てて本願に帰す

『真宗聖典』三九九頁

法然上人が繰り返し言われた言葉に対する答えがこの言葉ではないでしょうか。「どうか念仏申す生活をしてくださいね」と言われた時、それと聞き続けた親鸞聖人がその

言葉の響きの中で聞き取ったものがこの「雑行を棄てて本願に帰す」です。この言葉が親鸞聖人の言葉として今日も伝えられています。

また「雑行を棄てて本願に帰す」、親鸞聖人はきつと法然上人にこの内容を語ったと思うんです。親鸞聖人はきつと「雑行を棄てて本願に帰す」というかたちで念仏申せというおこところをいただきました。そして、そのおこころは「・・・」というかたちで法然上人と真向きになってお念仏のいわれを述べられたのではないのでしょうか。それを聞いた法然上人は「あつ、間違いない」と。その間違いないという証として親鸞聖人に二つのことを許されたわけですね。

一つはご自分の著書である『選択本願念仏集』を書き写すことを許された。もう一つ、法然上人の自画像を書き写すことも許された。そして書き写した『選択本願念仏集』を持参した時、法然上人自ら筆を執つて内題の字に「南無阿弥陀仏 往生の業 念仏為本」と「釋綽空」という当時の親鸞聖人の名前まで書いて

くださった。そういうことが歴史の史実としてあげられております。

『選択本願念仏集』を書き写すことを許された。これ大変なことなんです。当時、吉水の法然上人の元には多くの方々がお話を聞きに集まっておられた。しかし、実際に史実を通した時、『選択本願念仏集』を書き写されたのは、たった六人です。その内の一人なんです。これは、一体何を意味するのでしょうか。多くの方がいる中に、たった六人なんです。その内の一人なんです。それは「念仏せよ」、「念仏できる生活をしてください」というこの法然上人の言葉の中から親鸞聖人が確かに聞き取ったものがあるということだと思います。もしも聞き間違えをしていたら決してそんなことは許されないうわけですよ。聞き取ったことの事実として「建仁辛けんんにんかのとの酉とりの曆れき、雑行ぞうぎょうを棄てて本願に帰す」と言い表されております。

念仏申せない

そうしますとこの「念仏を申してください」、「念仏申す生活ができる

ようにしてください」「これを現代の私たちはどのように聞いているのでしょうか。親鸞聖人のお言葉を、あるいは蓮如上人のお言葉を通して「念仏申す生活をしてください」と繰り返し、繰り返し言われております。それを聞き続けている私たちは一体どうでしょうか。「念仏を申してください」と言われても素直に「ハイ」と言えたでしょうか。念仏を申して下さいと言われてもなかなか「ハイ」とは言えません。

現実の生活の中でいいますと、朝に家族が学校に通学、あるいは職場に出勤する時、家族として見送る方としては「行ってらっしゃい」と、そして「気をつけて行ってくださいね」とこう言います。私も朝出掛けには家族の者に「車の運転を気をつけて行ってらっしゃい」と言われます。これ何気ない言葉です。でもこれが大事でしょう。今日、ここへ車で来られた方もあるかもしれませんが、他にも、車を運転するという事は、ただ単に便利で快適で自分の思い通りになるということだけではない



境内の百日紅

のですよ。車に乗るということは、ひとつの覚悟をしなくてはならぬということです。自分が殺人者になるかもしれないという覚悟を持たないといけないのです。自分が殺人者になる可能性が大だということなのです。日本では年間どれだけの方が交通事故で亡くなっているのでしょうか。交通事故で亡くなったといつても、人をはねたりするということは殺人です。私も今日まで毎日のように車を運転してまいりました。でもヒヤッと

したことは何度もあります。一步間違えれば大事故を起こしていたということなのです。車を運転するということは今申したように、殺人者になる可能性があるとということです。その覚悟がないと運転できないということです。だから「気をつけて、気をつけて」でしょう。しかし、自分が気をつけていても追突されたり、巻き込まれたり色んなことが起こるわけです。だから家族の者は「気をつけて行ってらっしゃい」と言う。その時には、「ハイ」と返事できるわけですよ。

ところが、「車を運転するから気をつけて行ってらっしゃい、念仏申せよ」とその後「念仏申しなさい」と言われたら返事できるでしょうか。戸惑ってしまう。言葉としては「念仏申しなさい」ということは簡単な言葉遣いですが。しかし、なかなか念仏を申せないということです。

私も寺で生まれて寺で育ってまいりましたけれども、改めて自分はいつ頃から念仏申してきたんだろうかと言われてもはっきりしないんです

よ。ただ分かっていることは、十代二十代の頃はとても念仏など申せませんでした。しかし、この歳になつてみると、改めて念仏というものがないとだるようになってまいりました。なぜ私たちは「お念仏申せ」と言われても「ハイ」と返事ができないのでしょうか。そこにはあまりにも「念仏申せ」ということが簡単だということがあるのではないのでしょうか。

簡単そうで難しい

昨日も九月に一つの研修会に参加した折のことをお話したんですけれども、その研修会でこういうことがございました。その方は真言宗の僧籍を持っているお坊さんでした。ところが、真言宗のお坊さんですけれども、たまたま知り合つて結婚されたその連れ合いの方が浄土真宗のお寺の長女であった。そして今は真宗大谷派の僧籍を取られたわけですが、けれども、その方が研修会でこんなことを言われました。「真言宗の僧侶をしている時、浄土真宗という教えはなんて簡単な教えなんだろうか」

と、こういうふうに思っていました。

「苦しい修行をするわけでもなく、声にナンマンダブツ、ナンマンダブツを申すだけだからなんと簡単な宗教なんだろうか」と。外から見ていた時はそういうふうにも思っておりました。ところが真宗大谷派の僧侶となつて身を置いた時、「日本の宗教の中で一番難しいのが浄土真宗だということが分かりました」と、こう言われました。

び す む さ く

外から見えていた時は、なんと簡単な宗派なんだろうかと。ところがその真宗大谷派に入つてみた時、なんと難しい宗教やと。ここをどうお聞きになられるでしょうか。口に念仏申すことが難しいでしょうか。そうすると彼が言わんとした本質は何かなんです。なぜ日本の宗教の中で一番難しいのか、ここが大事なことでしよう。一つ窺い知れることは、彼は念仏を声に出すことが難しいと言っているのではないということですよ。念仏を申すことが難しいのではないのですよ。念仏を申すことに何かもう一つ大きな理由があるといふことですよ。

身につかない

先ほど申しましたように、私たちは様々な教えを聞いてまいりました。例えばその教えの一つの中には、「嘘をついたらいけません」という教えがあります。これは小さな子供から私たちまで一番わかり易い教えです。小さな子供の時から親や学校の先生や友達や先輩の方々から「嘘をついたらいけません」と言われ続けています。また我が子に対しても「嘘をついたらいけませんよ」というかたちで繰り返してまいりました。この言葉を語つてまいりました。ところが問題は、その教えが私にきちんとならぬかというところで、この一点はいかがでしょうか。「嘘をついたらいけません」という教えが本当に身についているでしょうか。自分のことを振り返りますと、私はバツです。子供の前では「嘘をついたらいけません」と言いました。でも今日まで生き続けてきた中に数えきれないほど友達や親や色々な方々に嘘を言つて逃れてきたという事実があります。嘘を言い続けてき

たんです。

それは何を表わすかといいますと、教えはあつてもその教えを少し聞いて、その前を素通りしてきたという事です。教えはあるんです。少し留まりはするけれども、身につかず素通りしてきたんです。つまり教えとして色んな教えがあるわけですけれども、色んな教えがあつても、問題はその教えが私に身についているかどうかということでしょう。なかなか教えが身につかないんですよ。「念仏申して下さい」と言われてもなかなか念仏申すことができない。あまりにも簡単過ぎるといふ面。あるいは念仏申したら一体どうなつていくのか。なぜ念仏を申すのか。そこまでしか受け止めないんです。その念仏の本質、大事なものを聞くということがいつの間にか抜け落ちていつたんでしよう。

聞き取る

親鸞聖人が法然上人の元にいらつしやつた時に「信行兩座しんぎょうりゅうざ」という大きな問題が起りました。「信の座」(本願を信じていること)か「行

の座」(念仏を申すことが大事)か、そういうふうな問答があつて、法然上人はどちらに座られたか。多くの方は、「念仏申せ」という言葉を聞いているから、きつと「念仏を申せ」という「行の座」の方に座るだろうと思ひ込んでいた。ところが、法然上人が自ら座られたのは「信の座」であつた。

同じように私たちも「念仏申せ」といつたら、ややもすると口に出す念仏を念仏申すことだと思つていてはならないでしょうか。呪文のように唱えることが念仏を申すことだと思つていた。そこにもう一度この「念仏を申せ」という言葉遣いが何を私たちに語りかけてくれているのか、そこが大事だと思います。

これも昨日申しましたが、あるおばあちゃんが内報恩講の前にお内仏の仏具を下ろされて、お嫁さんと一緒に、また家族の者と一緒に一つ一つ仏具のおみがきをされていた。そのおばあちゃんが亡くなるその年まで毎年、毎年言い続けた言葉が「お前なあ、仏具を磨くのはなあ、ただ

磨けばええのと違うんやぞ」と。「自分を磨くことやぞ」と。こう毎年、毎年おばあちゃんは、家族の前でそれを言うておった。嫁に来た時、おばあちゃんは何を言っているのか分からなかった。なんでそんなこと言うのだろうかと反発もしましたと。

なんでただピカピカに磨くことが駄目なんやろうと。磨いて、磨いて綺麗にするのが一番いいのに、ただ磨けばいいのと違うんやぞと。その言葉に反発して、「自分を磨くということはどういうことか分からん、もう磨くのをやめようと思ったこともありました」と、こうお母さんが言っておられました。聞き取れないんですよ。本心が。

しかし、自分もおばあちゃんになったそのお嫁さんは、嫁いできて何十年間のことを振り返った時、「何か分からんけれども、ようやくおばあちゃんの言った言葉の意味が少しずつ窺い知れることができました」と言われました。少しずつ何かまだはっきりしないけれども、わかるようになってきました。反発し、おみがきをするのを嫌になったことも

あったけれども、そのことを通していった時、何かそこにおばあちゃんと言わんとしたお心がようやく少しずつ分かってきましたと。

そうしますと、「お念仏を申せ」というのは、単に声に出すだけではないということ。そうするとそこに何かがあるか。それはお念仏を申すということを通して出遇わなければならないものがあるということ。どうしても最後、出遇っていかなければならないものがあるのです。

最後出遇っていくもの、一つは老いということ。一つは病ということ。最後は亡くなっていかなければならないということ。これが私たちがどうしても最後に出遇っていかなければならない大きな問題です。自分の力で、努力で何とかできるという問題ではないということです。一生懸命働いて、そして経験を積んで知識を持つたけれども、この三つの大きな問題は、経験、体験、知識をもつてしても我が身の力では為す術もないということ。特に若い時には

そのことに目はいきません。体力はあるし、気力はあるし、財力はあるし、何でも自分でできるという力を持っています。この時には「お念仏を申せ」という言葉はなかなか聞こえません。我が身でできるという意欲がありますから。

しかし、大切な人を失ったり、あるいは自分が大事にしていたものが崩れ去っていった時、どうすることもできない。「これから自分は一体どうしていけばいいのだろうか」と、はじめて自分というものが問題になってきた時、なんとなくお念仏申せという言葉が響いてくるのではないでしようか。

大切な人を亡くした時、なぜ人は亡くなっていくのだろうか。またこの私も亡くなっていかなければならないのだろうか。逃げることの出来ない老いと病と死というものが自分に迫ってきた時、何か分からんけれども、そこに念仏というものを申すようになってきた。

でもその念仏が分からないんです

疑心暗鬼

よ。その念仏が分からない時は、私たちはどうするかというと、念仏を疑ってしまうわけです。分からんことをいつているお念仏の方が問題なんだろうと。南無阿弥陀仏という六字の方に問題があるだろうと思ってしまうんです。しかし、問題は教えの方にあるのではないんですよ。問題はどこにあるかというと自分にあるということ。教えが分からないのではなくて、何が分からないのかというと自分が分からないということです。自分が分からないということ。自分を日本語ではこんな言葉を作ってくれています。疑心暗鬼という言葉です。疑う心は何を生み出すか。暗さと鬼を生み出すということ。念仏が分からんと疑う心。疑う心は、暗さと鬼を生み出していきます。その疑う心にあるのは何かというと、自分を疑う心です。私たちはどこまでも自分を疑うんですよ。

これは自分のことなるのですけれども、健康診断を受けた時に一枚のハガキが来まして、「再診の要あり、夕食と朝食を摂らずに来てくだ



古村 節子

「ささい」と書かれていました。そのハガキを見た瞬間、私の中に何が起こったか。自分の胃か腸に何か悪いものができているのかなど。「再診の要あり」ですから、胃か腸に癌があるのかもしれない。もしそうならどこまで進行しているのだろうか。まだ病院にも行っていないのにハガキ一枚を見た時に自分の中で疑心暗鬼が出てくるんです。そして、そこにもう一つ恐れというものを作

り出しました。どこまで癌が進行しているのだろうか。進行状態によつては、最終的結果を言われるかもしれない。その時どうなるか、恐れがあります。たった一枚のハガキの中にあつたすべてのものをガタガタと崩しました。出てきたのは疑う心と恐れのお心です。

そして、その再診に行った折、平生は何気ない言葉遣いを看護師の方に言われました。待合室で待っていた折に看護師の方が私の名前を呼んで「四番の診察室に入ってください」と。こう言われてしまったんです。

何気ない時は「ヨン」なんです。でも自分の体の状況から見れば落ち着いた状態ではありません。この四という数字をどう聞いてしまったかというところ、「シ」^死なんです。まだ結果も発表されていないのに四番の診察室に入ってくださいと言われた、その「ヨン」を私は「死」と読み替えてしまった。「あっ、これでもうお終いかな」と。何気ないことなんです。平生は隠れているのです。平生はそんなこと何も思わないのです。ところ

が、ふとしたところに平生の思いもよらない蓋が開いた。私たちはその蓋が開いた時に疑いと恐れというものを持ちます。

その疑いと恐れがでるのは何故かというところ、私たちは体質として常に100%でないで安心できないというものを持っているのですよ。100%でないで安心できないのですよ。たった1%でも疑いとすれば、恐れがでてくるんですよ。実は疑いと恐れ、それを誰が持っているか。それは私なんです。それが私の正体なんです。

自分の正体

「お念仏を申せ」ということは、お念仏を申すことを通して、この本願の呼び声に出遇うことを通して、日常の意識の中で忘れていた私というもの、その正体を晴らす。そのはたらきが念仏のはたらきではないでしょうか。私というものに出遇わせるはたらきです。じゃあ、この私の中に疑いと恐れ、この私の中に疑いと恐れ、この私の中に疑いと恐れ、また蓋が開けばきつと出てきます。いつまでたってもそ

のことを持ち続けているということ。現代という時代を生きている私たちも、親鸞聖人の時代も、人間の本質として同じものを持っているのではないのでしょうか。常に恐れと疑いの心しか持ち合わせないわけです。その恐れと疑いの心を持ち続けながら一体どう生きればいいのか。生きる方向と態度に悩んだり、苦しんだり、悲しんだりしつつ、そこに人間という身をいただいておられます。そこが大事なことでないでしょうか。

教えを聞いて喜べた。真宗の教えを聞いて真宗の教えが分かった。喜べたとか分かったとかそれはすべて自分の思いです。その自分の思いの中で分かった、領けたといっても何も解決しないです。本質は疑いと恐れを持ち、そして様々なことに悩み、苦しみ、悲しみを抱きながら亡くなつていくのがこの私です。この事実を覚えてくれるのが「念仏申せ」というはたらきではないでしょうか。「念仏を申せ」、そこにどうするか。平生忘れていた自分の正体と真向き

になつて欲しい。それが今は亡きおばあちゃんが言われた「自分を磨け」という言葉なんでしょう。自分の正体に出遇つてくれということですよ。なかなかこの自分の正体に出遇えないということですよ。

真言宗の僧侶から大谷派の僧侶に変わった方が日本中の宗教の中で浄土真宗が一番難しいと言った。最後にその彼は「自分に出遇うことの難しきですね」と答えました。自分に出遇うことの難しきなんですよ。

出遇うことの難しき

親鸞聖人も、法然上人の「念仏申せ」という言葉の中に、如来の本願の具体的なはたらきである仏の称号、すなわち南無阿弥陀仏を通した時、はじめて自分の正体というものに出遇つていかれた。迷い続けている自分。いずれの行もおよびがたき自分。常に自分で何でもできると思っていたけれど、何ひとつできない愚かな自分。そのことを「念仏申せ」という言葉の中に本願の呼び声を聞いた時、「建仁辛の酉の曆、雑行を棄てて本願に帰す」、自分の人生

においてはじめて自分というものに出遇わせていただきました。そこに親鸞聖人が本願と出遇ったんですよ。法然上人に出遇つて道が開いたのではないんですよ。もうどうすることもできない絶望の中で温かい呼び声が聞こえてきましたと。その呼び声を聞いた時、なんと恥ずかしい自分であつたか、なんと愚かな自分であつたか、そしてどこまでも迷つていく自分、苦しみ悩んでいる自分だということがようやく聞き取ることができましたと。それが親鸞聖人が私たちに「念仏申せ」と言われた内容でしょう。

それほど私たちは、この自分に出遇うことが一番難しいのです。自分のことは自分が分かっていると思つていますが、問題は本当の自分の正体です。自分の正体とは、一体何者なのか。親鸞聖人はその本願に出遇つたけれども、繰り返し、繰り返し言われることは、私の中には蛇と蝎が今もいますと。蛇蝎のごとくなる私やと。ひとつのことが頷けたけれども、私の中には今だ

に蛇と蝎が渦巻いていますと。こう『愚禿悲嘆述懐和讃』で申されております。

念仏申して分かつたつもりなんです。でも中にはいるんなものが渦巻いています。そのことを通した時、親鸞聖人のお言葉は現代を生きている私たちに鏡となつてくれてるんですよ。鏡を通して今の私をもう一度、点検吟味していくということが大切な意味合いではないでしょうか。「念仏を申せ」という言葉遣い、それは本願に触れるということですよ。本願に触れるということとは南無阿弥陀仏なんですよ。南無阿弥陀仏の一声が本願に私たちを触れさせているんですよ。我が身の正体をどうか明らかにして下さいと言われ続けているんですよ。ところがその声がなかなか私たちが聞き取れないのですよ。

『浄土和讃』の最初にこういう御和讃があります。

弥陀成仏のこのかたは

いまに十劫をへたまえり
法身の光輪きわもなく

世の盲冥をてらすなり

『真宗聖典』四七九頁

今ようやく聞こえてきました。長い色んなことを通した時、はじめて何か自分の正体というものに出遇つていくひとつの縁が開かれてくる。そこに親鸞聖人が、蓮如上人が繰り返し返されました「念仏申して下さい」、「念仏申す生活をして下さい」ということを、我が身というものを明らかにして下さいというお言葉として受け止めいくことが一番大事なことではないかと思つております。この二日間ご縁をいただきました。ありがとうございます。

《へんしゅうこうき》

◇平成二十六年十月十八日、「浄光寺報恩講・結願日中」の法話録でございます。洵に勝手ながら紙片の都合上、割愛、編集させていただきます。

◇「雑行を棄てて本願に帰す」という言葉で親鸞聖人は、信心を表白されました。よく仏教は難しいと耳にしますが、仏教が分からないのではないかと、自分自身が分からないので、私たちは、一体何者で、どこへ向かおうとしているのでしょうか。皆さんと共に訪ねてまいりたいと思ひます。

行事のご案内

「さいのVU」五月九日 午後二時
落語 玄川吉孝